

# 幻想文学と文学の諸相としての幻想、 およびV.ウルフ『灯台へ』による幻想の比喩

渡辺 青

## 序

幻想文学における幻想と幻想の意味は異なる。この意味の差異は視点の違いにより生じている。

ツヴェタン・トドロフは幻想文学における幻想の意味を定義した。その定義は現代において、幻想文学を論じるとき最初に言及されるそれであろう。一方で、それ以前に、E.M.フォースターが小説の諸相として幻想について語っている。一人は文学の理論について構造主義的な視点から論じ、一人は評論家として、また作家として語っている。詩学、文学史、批評がそれぞれまったく異なる独立した分野であることは事実として受け入れるとして、しかしながら、ある同一の言語における意味の差異が表面的であれ大きな隔たりとして感じられることは注目に値すると考える。このことは用語の問題として、人文学系の研究の根本的な欠陥として指摘されている点と結びつくのかもしれない。ユーリ・ロトマンは以下のように述べている。「現代人文学の大きな欠陥は、一般科学的認識の体系のみならず、人文系の隣接諸科学においても全く使用不可能な述語で自分たちの研究対象である諸現象を記述しようとすることである。音楽研究あるいは絵画理論の述語は学問的規定としてではなく、単にメタファとしてのみ文学研究において利用可能である。これは人文学の各領域における述語が、概して相互に一義的で計測可能な相関関係をもった統一的かつ厳密な体系におさめられていない、つまり、実質上述語ではないという事情による」<sup>1</sup>

この問題提起は即文明学の問題であると思われる。

## 1. ツヴェタン・トドロフの幻想

『幻想文学』という表現は、文学の一変種、一般に言うところの『文学のジャンル』にかかわっている。(中略) 本論の目的から言えば、幾つかのテキストに共通して機能し、そうしたテキストに『幻想的作品』という名称を与えるような、ある規則性を発見することなのであって、それぞれが持っているテキストが持っている個別的特性を指摘することではない<sup>2</sup>とトドロフ自身が述べるように、彼による幻想の議論は、何よりもジャンルとしての幻想文学の設定がある。議論の対象が何であれ、トドロフが最初にジャンルを設定しなくてはならないのは「ジャンルとはまさしく構造なのである。文学の諸要素の布置であり、可能な要素を集めた目録である」<sup>3</sup>と述べられるように、彼の学術的立場としては当然のことである。構造は意味の場であり、したがって、作品の意味を理解しようとするとき、その構造が明確でなくてはならないというのは、トドロフの基本的な姿勢である。

したがって、ジャンルの概念を設定することが当然必要となってくる。「ジャンルの理論は秩序の原理である——即ち、この理論は文学と文学史とを時間と場所（期間あるいは国語）

とによらずに組織と構造とのもつ特別な文学上の型によって分類するのである」<sup>4</sup>とウォーレンとウェレックは述べている。ジャンルの設定によって、文学が期間と国語から切り離して論じられることが可能になったことは、文学に対する新たな視点の獲得と考えてよいであろう。ただしジャンルは「新しい作品が累積されるにつれて、われわれの範疇はうごくのである」<sup>5</sup>と主張されるように、固定されるものではなく、「ジャンルの概念の内容は採られた視点によって規定される」<sup>6</sup>のものであろう。

以上の事を踏まえた上で、トドロフによれば幻想文学の構造的特性とは、読者に「ためらい」を要求することである。

「最初に、はっきり言葉にされることは稀であるが、幻想といえはまず心に浮かぶ意味（それが辞書にある意味だ）を取り上げておく。なにが起こりうることで、なにが起こりえないことかについては、それぞれの時代にそれぞれの認識があるのだが、こうした一般的認識に立って言えば、幻想的テキストの作者たちは実際の生活では起こりえないことを物語っているのである」<sup>7</sup>。

実際の生活では起こらないこととは、超自然、非現実、非日常、などの様々な言葉で表現されることが可能である。ただし、トドロフは「超自然が介入する作品をすべてひとまとめにする、したがってホメロスもシェークスピアも、セルバンテスもゲーテも、同じように迎え入れることができる、そのようなジャンルを想定することは出来ないだろう。超自然によっては、作品を十二分に特徴づけることができない。その外延があまりにも広すぎるのである」<sup>8</sup>と述べ、超自然を幻想文学のジャンルと分けている。トドロフにとって、幻想のジャンルに収まりきる、非現実、もしくは非日常的なことは、想像や錯覚、錯乱、夢、狂気といった現実の中に含まれる非現実として合理的に説明ができる可能性を残しているものなのである。それゆえに、幻想文学は読者に対して「ためらい」を要求することができるのである。

したがって、トドロフの幻想の定義で着目すべき点は、現実と幻想をはっきりと区別したところから議論が始まるということである。現実と幻想との差異がきわめて重要な役割を果たし、彼の理論を下支えしているのである。それは幻想文学というジャンルの設定にとって必要不可欠なことであり、またそうした視点からの理論の組み立てにとって重要であったに違いない。

「幻想とは、何らかの怪奇な出来事の本姓について、読者（主要作中人物と同一化している読者）が抱く『ためらい』に由来するものである。このためらいは、当の出来事を現実界に属するものと認めるか、想像力の結実ないし幻覚の所産とみなすか、いずれかに決することが出来れば解消する。言い換えれば、出来事が実在か否かを断定できれば、幻想が終わるということである」<sup>9</sup>

## 2. フォースターの幻想

E.M.フォースターにとって幻想は、あくまでも小説の諸相として捉えられている。それは、ストーリーやプロット、登場人物と同列に並べられ語られることができる小説の一相である。ゆえに、スターン、メルヴィル、ピーコック、ヴァージニア・ウルフ、ジョイス、D.H.ロレ

ンス、スウィフトから幻想を取り去ると、他には何も残らないと述べる事が出来るのであるろう<sup>10</sup>。

「われわれが真実を、人生から小説へあるいは小説から講義へと、ひとつの世界から他の世界へ移しかえようとするとき、その真実に何かがおこり、狂いが生まれ、しかもそれに気付くほど急にではなく徐々にそうなるのです」<sup>11</sup>

フォースターによって幻想の議論はこのように始められる。そのうえで、彼は以下のように幻想を定義している。

「わたくしのいうのは、何かしら、それらの様相を一筋の光線のように横ぎっているもの、あるところではそれらの様相と密接に関連してそれらの問題に辛抱よく照明を与え、他のところではまるでそれらの様相がないかのようにそれらの上をあるいはそれらを買いて射しているものです。この一筋の光線に幻想と予言という二つの名をつけましょう」<sup>12</sup>

最初に、真実をひとつの世界から他の世界に移し変える過程について述べられていることに注目する。この移しかえは、広い意味での表現として理解されるだろうと思われる。この表現の過程において徐々に真実に狂いが生じるという言葉が、幻想とどのように結びつくのかと言う点を、フォースターは光の比喩で説明しようとしているのである。それらの様相とはここでは小説の「時間・人物・論理・それら派生以上のもの」<sup>13</sup>を指す。こうした諸相を貫き照らす光が幻想であるというのがフォースターの幻想なのである。さらにフォースターは幻想と予言を区別する際に「この両者は神々を持つという点では似ていますが、それらの持っている神々が違うのです」<sup>14</sup>と述べている。

以上のように、フォースターにとっての幻想の定義は文章だけから判断するには複雑で、分かりにくいかもしれないが、以下のように三点に要約するとすっきりする。

1. 幻想は表現に関係することである。
2. 幻想は光のようなものである。
3. 幻想は何らかの神話を有する。

この三つの点に関して、共通の言葉を探すとき、私たちはフォースターが幻想に与えている意味を見出せるかもしれない。

### 3. ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』

「リリーは勇気を振りしぼって『でもわたしにはこう見える、こう見えるのよ』と叫ぼうとする。だが目には見えない無数の力が押し寄せてきて彼女のヴィジョンを奪い去り、もぎ取ろうとするので、彼女にできるのは、せめてヴィジョンの無残な残骸を胸に抱きしめることだけだった」<sup>16</sup>

リリー・プリスコウはキャンパスにラムジー氏の庭とテラスにいるラムジー婦人、そしてその息子の絵を描こうとしている。リリーは彼女に見えるありのままのジャクマナの花や家の壁の色彩や形を描こうとしているが、「イメージを思い描く時とキャンパスに向かう時をへだてるほんの一瞬の間」<sup>17</sup>「頭の中の構想と実際の作業とを結ぶこの細道」<sup>18</sup>の後では全てが変わってしまうということと、それに対する無力感がここで表現されている。何かを表現しようとするとき、このリリーのようなジレンマを経験することは難しいことではない。そ

それは、絵画や音楽、詩というような芸術的な仕事としての表現だけではなく、日常的な会話の中でも起こりうる。

フォースターの幻想の要約1を対照すると、両者の強い類似性を認めることが出来るだろう。それは、何かを表現しようとするとき、そこには何らかの変更が常に起こりうるということの強調である。では光の比喩についてはどうか。

「灯台の光、あの三度目に放たれる長くしっかりとした光の一投を迎え入れるべく、静かに目を上げた。あれはわたしの光だ。いつもこんな時間にこんな気分で周囲を見ていると、見ている何かに自分が溶け込んでいくような気がする。あのゆっくりと長い光にしても、まるで自分のもののように感じられる。時々婦人は、手仕事をかかえてすわったまま、じっと何かを繰り返し見つめていて、やがて自分が見つめているもの——たとえばこの灯台の灯り——と一体となる思いに見舞われることがあった」<sup>19</sup>

以上は、ラムジー婦人の視点と灯台の光と一致する象徴的なシーンの抜粋である。光は視点や見方の比喩として考えられる。光が照らしている部分だけを見る事が出来るのであり、それ以外の場所はまるで存在していないかのように、闇という言葉で片付けられてしまう。しかしながら、光なしに何かを見る事が出来るわけではない。したがって、誰の光であろうと、何かを見ようとすれば、灯台の光と一体になるように、それに従わざるをえないのである。そして、その光がどこから発せられているのかという点は、フォースターにおける神話との関連を思わせる。

『灯台へ』において自ら光を発している、あるいは光を発しようとしているのは、灯台とリリー・プリスコウであろう。光はストロークと表現され、灯台は三つのストロークをリズムカルに投げている。最初と、次は短く、三つ目は長いストロークである。リリーは、彼女の絵筆を振り下ろすときに、ストロークと言う表現を用いられている。彼女のストロークの瞬間に至るまで、またその後で、例の表現のためのジレンマが存在している。第一次大戦を挟んで10年の歳月を経、ようやく完成に至る彼女の絵と、そのときの彼女の思いは、この作品の最後のセンテンスとなっている。

「ただ、あれは屋根裏部屋に掛けられるのがせいぜいで、下手をすると処分されてしまうかもしれない。でも、それが一体どうしたっていうの？ 構わないじゃないの、と彼女は自分に言い聞かせるようにして、もう一度絵筆を手を取った。あらためて客間の踏み段を見る——空っぽだ。キャンバスを見る——焦点がぼやけている。その時突然激しい思いにかられ、一瞬はつきりそれを見届けたかのように、キャンバスのちょうど真ん中に、リリーは一本の線を描いた。できた、とうとう終わったわ。極度の疲れのなかで絵筆をおきながら、彼女は思った。そう、わたしは自分の見方をつかんだわ」<sup>20</sup>

#### 4. 結論

幻想という言葉の意味がもつ常識的なイメージは、現実と非現実という二項対立的な視点から考えるとかなり明確な意味を設定することが出来る。トドロフはこの二項の差異を厳密にしようというところから、彼の議論を出發させている訳だが、二項対立という事柄は、その両者が一方によって説明されるという依存的な関係を既に含んでいると言える。

フォースターは表現の場において、その作者の見方が介入した時には、そこに幻想があるということを描している。むしろ作者の見方そのものが幻想であるとしているように考えられる。こうした点を考える中で私が想起するのは、例えばincomprehensible（常に余剰を残す全体）というような概念である。繰り返される生産活動という言葉の背後には何らかの破壊の意味があり、従って完全なものに破壊がない以上、当然再生産もなく、故に変化は無いのだから、再生産を条件とする文明営為がincomprehensibleであることは妥当である。文明学はこうした文明営為をテキストとしており、この前提によりideologiekritikという文明学の方法が示される<sup>21</sup>。

幻想が日常や現実を破壊するとき、直ぐその後でその破壊に意味を与えようとする創造的な働きが引き起こされる。そのわずかな時間の中に起こる「ためらい」がトドロフの語った幻想である。そして、それはおそらく、フォースターが説明を与え、ヴァージニア・ウルフが小説に描いたリリー・プリスコウの表現に関する描写と関係しているだろう。しかし、「ためらい」だけで幻想文学を定義するのはやはり不十分であると言わざるを得ない。というのは、幻想と見方という考えは、現実と非現実の分離をゆさぶり、現実という言葉の持つ常識的なイメージに疑念を投げかけるからである。

- 1 Yu. M. ロトマン『文学理論と構造主義－テキストへの記号論的アプローチ』磯谷孝訳 1978、p.15.
- 2 T. トドロフ『幻想文学論序説』三好郁朗訳、東京創元社、1999、p.11.
- 3 トドロフ、1999、p.210.
- 4 R. ウェレック、A. ウォーレン『文学の理論』太田三郎訳、筑摩書房、1967、p.245.
- 5 ウェレック、ウォーレン、1967、p.246.
- 6 トドロフ、1999、p.13.
- 7 トドロフ、1999、p.56.
- 8 トドロフ、1999、pp.55－56.
- 9 トドロフ、1999、p.232.
- 10 E. M. フォースター『小説とは何か』米田一彦訳、ダヴィッド社、1969
- 11 フォースター、1969、p.130.
- 12 フォースター、1969、p.130.
- 13 フォースター、1969、p.130.
- 14 フォースター、1969、p.1337.
- 15 V. ウルフ『灯台へ』御興哲也訳、岩波書店、2004、p.35.
- 16 ウルフ、2004、p.35.
- 17 ウルフ、2004、p.35.
- 18 ウルフ、2004、p.117.
- 19 ウルフ、2004、pp.405－406.
- 20 斎藤博『文明学と方法』文明研究第20号